Q. 学校教育コーディネーターとはどんな役割をしているのでしょう?

A. 杉並区と世田谷区の学校教育コーディネーターの方々に、コーディネーターの在り方や学校とのかかわりについて御意見を伺いました。

これまでの事例の中にも、学校教育コーディネーター（以下コーディネーターという。）という役割が重要であるという話が出てきました。コーディネーターは、学校外部にある教育力を学校の教育活動に効果的に導入するために、学校と外部の教育力をつなぐ役割を果たしています。コーディネーターには誰でもすぐになれるわけではありません。コーディネーターについてのノウハウを知り経験を積むことによって、より効果的に外部の教育力を学校へ導入することができるようになります。ですから研修会を開き、積極的にコーディネーターの育成を進めている地域やＮＰＯもあります。ここでは杉並区と世田谷区で実際にコーディネーターとして活躍している方々に来ていただき話を伺いました。（座談会は平成17年10月11日に行いました。）

※ 本誌で使用している「学校教育コーディネーター」という名称は地区によって違います。学校支援コーディネーター、教育コーディネーターなどと呼んでいる地区もありますが役割は同じです。

外部人材を導入する授業が増えてきていますが、外部人材をどのように導入すると効果的な授業が展開できると考えていますか?

椋下聡美さん
平成16年設立のＮＰＯ法人「世田谷まなびばネット」元代表。設立以前からメンバーとともに世田谷区の地域活性化のために活躍し、今年度から学校支援コーディネーターとして本格的に活動を始める。
（※平成17年12月10日より世田谷区教育委員に就任しました。座談会の時点では、世田谷まなびばネットの代表を務めていました。）

椋下　世田谷区では、17年度からコーディネーターを試験的に数校に配置しました。私がコーディネーターとして実際に学校現場に入って感じたことは、ゲストティーチャーを入れると、先生方がゲストティーチャーにすべて任せてしまうかと思ったんですけど、そうでもないということです。私が授業について相談にのった先生も、以前から授業の組み立ての中で「ここの15分にゲストティーチャーを入れると、もっと授業がよくなる。」と思っていたそうです。それを今年度からコーディネーターがうまくつないでくれるので、思い通りの授業ができるから嬉しいって先生が言っていました。それを聞いて私も嬉しかったです。

生重　杉並区では、コーディネーター制度を４年前から導入しています。私はコーディネーターになる前からも学校や先生方にかかわっていますが、椋下さんと同じように「授業の中のこの部分をゲストティーチャーに任せる。」ということが理想だと思っています。ゲストティーチャーが持っているものを短時間で話してもらった方がいいことがあるんですね。例えばゲストティーチャーが来て話しても子どもは「この人何を話しているんだろう。」っていう顔をすることがあります。45分間ゲストティーチャーが話し続けるより、先生が「今日はここまでこんな学習をしてきたけど、もっと詳しく教えてくれるゲストティーチャーが来てくれました。この先生はみんなの学習して

きたことにかかわる、こんな仕事をしているんだよ。じゃあ先生の話きいてみようね。」って仕切ってくれると、子どもたちが自分たちの学習と関係のある話をしに来てくれたとわかり、集中して話を聞けます。また小学校の英語の学習だったら、先生が英語を上手に話せなくて当然だから地域人材を活用する。先生が進める中で、その人たちが流暢（りゅうちょう）な英語を話してくれるような授業が展開できたら、先生方の気持ちも楽になるんじゃないですか？英語を使える人は今たくさんいるんだから活用すべきですよ。先生がすべてをやる必要はありません。押さえるところを押さえてくだされば いいんです。

香月　そうですね。私は２年前から杉並区でコーディネーターとしての活動を始めましたが、学校現場には、きてきて先生プロジェクトの活動を通して５年前からかかわっていました。今まで活動してきて、先生方の指導技術はすごいなといつも思っています。例えば「静かにしてください！」という一言にしても、私たちが言うより、先生方の一言に子どもは素早く反応しますね。日頃からの関係があるのでしょう。私たちにはできません。

香月よう子さん
フリーアナウンサー。きてきて先生プロジェクト代表。平成13年度より、スポーツ選手など幅広いジャンルの講師と子どもの出会いをつくり、子どもと町の元気を支援。平成15年度より杉並区学校教育コーディネーターとしても活動している他、経験をもとに講演会やコメンテーターとして活躍中。

生重　そうですね。子どもたちを手拍子一つで静かにさせるとかそういう技を使えるのは先生方だけです。

香月　先生が授業を全部やる必要はないんですよね。専門的な知識を持ったゲストティーチャーに任せる部分があっていいし、かといってゲストティーチャーに任せっきりにしちゃうわけでもない。まさに、教えるプロと専門的知識をもつプロとのコラボレーション（共同作業）ですね。

先生が押さえるところは押さえ、
外部の専門的な教育力を入れていく。

生重　授業をコーディネートするのは先生ですから、授業の流れの中でどのようにゲストティーチャーを入れていくのかというビジョンがあれば、ゲストティーチャーと連絡をとっていくかなど細かいことはコーディネーターに任せてもらって大丈夫です。

椋下　でも、先生方の中にはコーディネーターの力を借りずに、自分でゲストティーチャーを呼んできて授業をつくっていく先生っていますよね。

香月　確かに先生方の中には、コーディネートがうまい先生はいますね。

生重　そうですね。先生の知っている保護者や地域の方の人脈などを使って授業を組み立てている先生は実はいっぱいいます。でもそういう先生だけではないし、その先生がいつまでもその学校にいるわけではありません。そういうときに学校にコーディネーターがいれば、地域の教育資源と学校とのつなぎを円滑にやってくれますし、そういう活動を継続的に行えます。学校にそんな体制があると、先生方も楽になります。

自分で、できる先生もいる。
でもコーディネーターがいるともっといい。

学校教育コーディネーターはどんな役割を果たしているのでしょうか？

香月　私は先ほど話したように、スポーツ選手や文化人などの社会人講師が学校の授業に入る、きてきて先生プロジェクトという活動を５年前から行っています。なぜこのような活動を始めたかというと、当時はまだ、ただ単に外部の人材を連れてきたイベント的な授業が多く見られました。だからそこに学校のカリキュラムに沿った事前・事後授業を含めた流れを考えるなどプロデュース機能があればイベント授業にならないだろうと考え、きてきて先生の活動を始めました。ただ、今考えると、その時は「今の教育はだめだ！授業を私がつくろう！」という考えに頭がいっていました。だから、自分が授業をプロデュースしたりデザインしたりという考え方で活動していました。でも３年経ったころから「自分が授業をつくろう」という考え方から「先生ありきゲストありき」と考えるようになり、その中で両者の協力関係が最大限の状態になるように、私はうまくつなぐだけでいいんだと思えるようになりました。その時期に「コーディネーター」という言葉を耳にして、私がやろうとしている役はまさにこれだって思ったんです。

生重幸恵さん
平成14年度「杉並区学校教育コーディネーター」制度の第1期の委託を受けたＮＰＯ法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事。区内小中学校でコーディネーターとして活動している他、学校教育支援についての講演などコーディネーター活動を広めるために全国を駆け回っている。

生重　自分の理想を求めるのでなく、両者の合意の下に授業をしていくんだと思うようになったんですね。人を生かそうとしたきっかけは何ですか？

香月　活動を始めてから３年目に先生方に授業に入る社会人講師についての思いを話してもらいました。その時、先生方は、その社会人講師をなぜ呼びたいのか、どう活用したいのかなどいろいろな思いを持っていて、先生はすごく考えているんだっていうことに気付きました。

生重　先生方もただのイベントではなく学習としてやらないと授業でやる意味がないってことは分かっています。だから「この授業のためにどんなゲストティーチャーを呼びましょうか？」って提案すると、先生方の思いもいろいろ出てきますよね。それからゲストティーチャーの方にもちゃんと「何がしたいから、ぜひ必要なんだ。」ということを伝えないといけないと思います。そうしないと授業が効果的には進みません。

先生の思いを受け止め、うまく学校と外部人材をつなげる。

学校教育コーディネーターとしてどのようなことを心がけていますか？

生重　私がコーディネートするときには必ず事前にそのクラスの授業を見に行きます。そして、そのクラスのよさや特徴を知って、先生と話し合います。クラスの状況を理解して話し合う中で先生と信頼関係をつくっていくことがコーディネーターに求められていることだと思います。先生方が「授業のこの10分のためにゲストティーチャーがいてくれたら。」ということを率直に相

談してくれるような信頼関係ができるといいと思います。先生方が「こんなことできたらいいな。」ということをコーディネーターにどんどん頼んでくれる関係になるのがいいと思います。

椋下　以前、世田谷の校長先生方に「求めるコーディネーター像」を聞いたときに「先生方に信頼される方がいい。」とおっしゃっていました。そのような人間関係をつくって先生とコーディネーターが一緒になって授業をつくれるといいのですね。

先生方との信頼関係を作ることが大事。

椋下　世田谷区でも外部人材を活用するために、積極的にコーディネーターを利用してくれる学校があります。その反面「外部人材を取り入れた授業をやってみませんか？」と聞いても、消極的な返事しか返って来ない学校もあります。そういう学校に対してはどうしたらいいですか。

生重　せっかくコーディネーターを区として導入したのだから、試しに１つくらいコーディネーターが持ってきた授業をやってみてはいかがですかと率直に話して働きかけます。実際に授業をやってみると、先生方も「多様な人材が来るとこんなこともできるんだ。」って気付きます。

香月　ゲストティーチャーを呼んで授業をしてみて、子どもが変わる姿を見たら、先生は変わりますね。先生方は子どもたちの変容をしっかり受け止めます。

コーディネーターがつないだ特別活動でのダブルダッチ世界チャンピオンの大学生チームの指導に子どもたちの意欲も大いに高まった。（写真提供：世田谷まなびばネット）

生重　そうですね。そしてそれを経験した先生は次から次にアイディアが湧いてくるので、いろいろな要求が出てきます。先生方は教えるプロです。自分の授業がより魅力的になる方法はないか、子どもたちがより理解を深められる授業にする方法はないかを常に考えています。だからその方法の一つとして、自分がプロとしてゲストティーチャーをどう授業に生かしていくか考えてくれるようになるといいと思っています。そしてさらにゲストティーチャーを取り入れることが楽しいからと言って、コーディネーターと一緒になってネットワークをつくっていく先生が増えてくるといいと思います。

椋下　私は先生方と一緒に授業考えるときに、先生方自身の授業に対するビジョンを聞けるといい授業が組めるのではないかと考えています。でも先生方は会議や事務処理などで忙しいから、なかなか聞けません。どうしたら話を聞けるんでしょう？

香月　一緒に作業したりしながら雑談する中で、ちょっとずつ話してくれるようになりますよ。

生重　あまりこちらが力を入れていくと、相手側にも、もっと力が入ります。だから私たちがソフトにいかないといけません。

香月　気軽に話せるようになると「これから継続してやりたいことがあるので５年生でやりたい。」とか「学習の導入として使いたいから１学期にやりたい。」とか、先生方から前向きな話が聞けるようになります。

生重　先生方が、外部の人材の活用の仕方が分かってくるからですよね。

香月　そうですね。先生方はどうすればもっと効果的になるかを考え始めます。

生重　先生方は納得するといろいろ活用方法を考えます。けれども、いきなり矢継ぎ早にこうした方がいい、ああした方がいいと言われると引いてしまいますから、そこは気を付けるようにし

ないといけませんね。

香月　「それならやめておきます。」と、なってしまうんですよね。それはもったいないです。

生重　それから1回やってみると、結構先生方は「こういうところがよかった。」とか「ここをこうすればいい。」という考えをもってくれます。だから1回だけで終わらせるよりは、継続した方がよりよいものになっていきます。ただ先生方は、毎年担当学年は変わるし異動もあります。だからゲストティーチャーを生かした授業を展開したことで、先生方にどの学年を担当しても、どこへ異動しても、外部とのつながりを生かした授業ができるんだ、ネットワークを広げていきたいという意識をもってもらえるようしていきたいと考えています。そのためにも先生にとっての「よかった」をどれだけ出せるかが大事だと思います。それがコーディネーターとしての私たちの務めだと思います。

きてきて先生プロジェクト
昼休みは、授業と違った楽しさがあるようです。全校生徒がアメリカンフットボールの選手と鬼ごっこをしたり、ドッジボールをしたり。選手たちも本気になって遊んでいました。双方にとって楽しい時間です。授業内容については、http:www.kitesen.org（写真提供：きてきて先生プロジェクト）

先生の「よかった」をどれだけ出せるかが大事になる。

先生の「よかった」を出すためには、どうすればいいのでしょうか？

夢をかなえた大人に出会うキャリア教育の一環「ドリームカムトゥー」でもコーディネーターが職業人と生徒を出会わせる。（写真提供：スクール・アドバイス・ネットワーク）

生重　私は学校にかかわりながら学校に閉塞感を感じてきました。先生方は一つの教育活動を行うときに企画から運営、そして苦情処理までとたくさんのことをこなさなければいけません。学校現場はしんどいんです。もっとサポートする人がいたらいいのにと思っていました。例えば、授業で学んだことをグループで校外に出て深められるといいけれども、学校だけでは安全面でも難しい。それが各グループに専門のゲストティーチャーがいて、安全面だけを守るボランティアの方がいて、子どもたちが学んだことを実際に自分の地域に出て体験できたらとてもいいことだし、先生だって願ったりです。それを実現するには人手がいるけど、今まで学校には、それを保護者や地域の方々に頼めるシステムがありませんでした。

椋下　そういうシステムが今必要になってきているから、地域や保護者と学校をつなぐコーディネーターの存在も大切になってくるのですね。

生重　そうですね。さらに保護者や地域の方の発想の転換も必要だと思います。何でも先生方に任せるのではなく「学校にみんなが参加してつくっていく、先生方へ協力しよう。」という発想が必要だと思います。実は学校に協力したいと思っている人が地域にはいっぱいいます。きっかけをどう作るかなんです。みんなで協力して、前向きにいろいろ考えてみるといいと思います。そうすると充実した時間が作れて、子どもが変わり、先生が変わります。それを見て親も変わります。協力してくれる人を増やすことで、確実に学校は変わります。その考えを基本に据えてコ

ーディネーターとしての活動をしていきたいと考えています。

香月　なるほど。私たちのきてきて先生プロジェクトでも、子どもたちや先生方にとっての「よかった」だけでなく、実際に授業を展開してくれた社会人講師からも、子どもたちとの交流の中から「新鮮な感動があった。」など、好評をいただいています。それぞれかかわる人のメリットを考えていくのがいいのでしょうね。例えば親なら自分の子どもの幸せをまず考えると思います。「地域社会のために活動して。」って言われても、あまり真剣に考えないけど、子どもとつながったところで考え始めると「だから地域社会をよくしないといけないんだ。」となると思います。だからコーディネーターとしても、先生にとってのメリットとか、ゲストティーチャーや地域の人たちにとってのメリットとか、それぞれのメリットは何かを考えてあげるといいのかも知れませんね。

学校をみんなでつくっていく。
先生も、子どもも、地域も、「よかった」って思える活動ができるといい。

これから学校教育コーディネーターとして、学校を支援していくための方向性をどう考えていますか?

香月　私たちのきてきて先生プロジェクトは、子どもとかかわりたいという観点からスタッフが集まりました。私たち以外にも、企業や子どもはいないけど地域にかかわりたいと思っている人はたくさんいます。そこにアプローチできないのでは、本当の地域連携とは言えないと思います地域にはいろいろな人がいるから、それらの人が学校へ行ける状態を作るのがいいのではないかと思います。

椋下　私たちのＮＰＯは、地域社会の中ですっぽり抜けている世代をつなぐことを目的にしています。私たちのメンバーは地域活動を通して地域の年配の方とも若い方ともつながっていて、地域社会のパイプ役となっています。だからそれらの人たちをつなぐ役、コーディネーターとしてＮＰＯを作りました。そこから始まり、地域にある教育資源と学校を結んでいくようになりました。子どもたちを真ん中にして、みんなが集まってくるような地域社会を目指しています。

香月　まずは、地域の中で、地域人材をうまく使っていくのがいいですね。

椋下　地域人材を生かすとともに、香月さんのような企業やＮＰＯと学校をつなげられるパイプをもったコーディネーターと両方必要なんですよね。

生重　同じタイプをそろえるよりはいろいろなタイプがいたほうがいいでしょうね。学校は初めは地縁型を望むけれど、いずれそれだけでは足りない部分がでてきます。そんな時に、そこへＮＰＯや企業などの教育力を入れていくんです。これからはＮＰＯや企業など機能的な集まりであるアソシエーション型と地域のコミュニティ型とがうまく交わることによって、もっと魅力的な活動をつくっていくことができるんだと思います。

協力したい人もたくさんいる。
その人たちをどうつないでいくかが大事。

ありがとうございました。